

もっと知りたい

ふるさと

42

国指定史跡 有明山將軍塚古墳

平成6年7月1日発行の『更埴市史』第1巻では、森將軍塚古墳は昭和46年3月に国の指定史跡に、倉科・土口兩將軍塚古墳は48年3月に県の指定遺跡に、また有明山將軍塚古墳は6世紀前半の築造といわれ、48年10月に更埴市指定遺跡に甘んじていた。

平成11年から12年にかけて、国50都府県・県15市町村の総額1670万円余で、有明山・倉科兩將軍塚古墳を、東京学芸大学と静岡大学の学生、文化庁・県教委・指導者 岩崎卓也氏・木下正史 東京学芸大学教授・滝沢誠静岡大学准教授、地権者の協力を得て、27日間延658人によって発掘調査され、平成14年3月28日調査報告書を発行。



粟佐橋東より見た有明山將軍塚古墳 (前方後円墳 墳長 37メートル)

以下この報告書にもとづいて私見を交えて解説する。

有明山は過去に盗掘にあいながらも、鉄簇鉄斧刃剣と最も重要な甲冑の部品「小札」が10枚以上発見された。これによつて一躍考古学者に注目された。平成13年までで小札の出土した古墳は、京都で3ヶ所、大阪で2ヶ所、福岡・兵庫・滋賀・三重・奈良・愛媛で合計11ヶ所。これらの古墳からの小札は特殊鋼で、今迄の鉄製品と格段な違いの武器防具である。

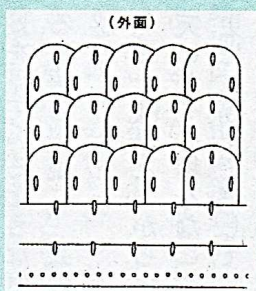
ここで朝鮮半島の歴史を見ると紀元前37年に建国した高句麗の王「朱蒙」が紀元前40年鋼鉄の開発に成功、強力な鉄器軍を編成。西暦500年頃には、遼東半島旧満州の一部と朝鮮の85パーセントを支配(391年19代王「広開土太王」より)。668年新羅・唐の連合軍に敗れ滅ぶ。

この製鉄技術が日本に伝わり大和王権成立にかかわった武人が前記11府県の古墳の被葬者で、有明山古墳の被葬者

も同等と考えられ、木下正史氏・土屋哲樹氏は「小札の形態・大きさ・孔の数・穿孔位置・革綴の方法から小札革綴甲冑で全て前期古墳(300〜400年)の副葬品としてのみ存在する。これにより有明山古墳の築造年代の有力な手がかりになると、また報告書でこれまで千曲川右岸の4基の古墳は森・有明山・倉科・土口の築造と改めなければならぬ」としている。そして有明山は4世紀代の築造と解される(木下正史氏)。ここでアルカ考古学セミナー「国境のない考古学会第4回」で県内24基の古墳の中で有明山のみ小札が出土した事で、意義深いものを感じ、学者の大半は山を利用しての造りは最古といわれ、これらの被葬者は大和王権につながる重要な地位にあり、鏡の管理者など政治的に結ばれていた。また、これらの権力者は死後かつて統治した土地を一望出来る高所に埋葬するよう後継者に託したといわれている。森將軍塚

古墳の高さは490センチメートル、有明山將軍塚古墳は55センチメートル、高々545センチメートル、倉科將軍塚古墳は540センチメートル、土口將軍塚古墳は450センチメートルとなつている。

現代人の感覚で大王を見下す高所に有明山將軍の墓は作られるだろうか。森將軍よりも眺望範囲が広い事も有明山の被葬者が上位ではないかと推察される。



図元復元甲冑を使った小札 (京都府立山城郷土資料館互谷1号墳遺跡調査報告所23号より)

小札の形状については上辺が円弧状で下辺が直線で長さ中共に3.5センチメートルから5センチメートル、厚さ1センチメートルから1.5センチメートルの薄い鉄板で上下端に2センチメートルから5センチメートルの小円孔があり、革綴の痕跡があり、滋賀県の雪の山古墳出土の魚鱗形小札に似た形に復元出来たと記される。また、鉄の材料は朝鮮半島北部の磁鉄鋼が使われ剣の刃部に鋼を配し合せ鍛えた構造と推定される。平成19年2月、有明山・倉科・土口將軍塚全て国の史跡に指定された。